

国際伝道論研究の意義

葛 野 洋 明

はじめに

二〇一八年には、龍谷大学の実践真宗学研究科が開設一〇周年を迎える。現在に至るまで、従来の研究を礎に、実践真宗学における様々な研究が展開されてきた。その中でも二〇一六年度より「国際伝道論研究」という講義が開設された。実践真宗学の研究の一つとして取り上げられていた、浄土真宗の国際伝道を主とする研究が、一講義として開設された。

浄土真宗における国際伝道は一世紀を越える歴史がある。その研究は、個々の研究者が個別の問題意識のもと、様々な視点から研究されてきた。しかし国際伝道に関する総合的な研究がなされているとは見受けられない。国際伝道論研究は真宗伝道に関する研究の一分野であるが、同時に真宗伝道全体に大きく影響する研究分野であるとも考える。

国際伝道論研究の総合的な研究が結実されていくことを希求し、真宗学における国際伝道論研究の研究範囲、研究目的、研究方法の検討を行い、その上で国際伝道論研究の意義を顕らかにしたい。

なお、当論文は「龍谷大学真宗学会 第七一回大会」(二〇一七(平成二九)年一月一四日)において、同研究題目において研究発表を行い、質疑に応答し、またその後には示唆に富むご教導を得た上で、まとめたものである。

一 国際伝道論研究の経緯と現状

一 経緯

当論文で取り上げる国際伝道については、浄土真宗本願寺派(以下「本願寺派」と略す)の国際伝道に絞って検討をする。その理由については当論文の「二―三 当面の研究範囲」において論及する。

本願寺派の国際伝道に関する歴史については、概括的ではあるが既に整理をした⁽¹⁾。ここでは、国際伝道論研究に関する、いままでの経緯を概観しておきたい。

明治期に海外に視察や留学をして、仏教学の新しい研究方法を移入したことも国際伝道論研究のはじまりの一つと言えるであろう。しかし、国際伝道論研究が本格化してきたのは、移民伝道が活性化し、開教使を養成する人材養成に伴って進展してきたと言えるであろう。特に国際伝道が展開されている現地で生まれ、その国の言語を第一言語とする人を開教使に育てようと、日本への留学が盛んとなった。それと同時に、日本から海外に渡り開教使となろうとする学生がいて、龍谷大学において、多くの留学生の受け入れや、開教使希望学生を育成してきた。現在、各開教区で活躍している実績ある開教使の多くが育成された。

一九八〇(昭和五五)年度から、龍谷大学に「開教使課程」が開設され、現在は「特別研修講座」として継続的に人材育成がなされている。これに伴って国際伝道論研究の一端が進められてきたと言えるであろう。

一九八〇(昭和五五)年四月、時同じくして、国際仏教文化協会 International Association of Buddhist Cul-

ture (IABC) (現…公益財団法人) が設立された⁽²⁾。

この協会は特にヨーロッパなどで、浄土真宗の教えを聞信する人々を、物心両面から支援するために設立された。現在も「ヨーロッパ真宗会議」を継続的に開催するなどして、多くの支援を続けている。

一九八二(昭和五七)年には、国際真宗学会 The International Association of Shin Buddhist Studies (IASBS)⁽³⁾ が設立された。この学会は、浄土真宗を中心とした世界的な学術団体であり、国内外の研究者によって、「国際真宗学会大会」が継続的に開催され、また『The Pure Land』を発刊している。

二〇一二(平成二四)年二月一〇日には、本願寺派において「国際伝道推進規程」⁽⁴⁾ が定められ、従来は「海外開教」と称して活動を展開してきたが、国際伝道と名称が改められ伝道活動が展開されている。

浄土真宗における国際伝道は、海外における伝道を現場としつつ、その要請を受けて開始されたが、その現場で伝道に携わる開教使を養成する人材育成の教育を中心に、人的交流をはじめ文化的側面などのサポートもされるようになり、国外に限らず国内外の研究者が様々な視点や方法をもって、学術的研究を進めるように進展してきた。

一・二 現状

国際伝道論研究の現状を明らかにするため、まずは国際伝道の現状を本願寺派の国際伝道の現実から窺っておこう。

本願寺派の国際伝道においては、開教区と開教地が設けられている⁽⁵⁾。

開教区は、教団・海外別院・開教区寺院またはこれに準ずる団体を置くことができ、開教本部を置いて、開教区の宗務を総轄する開教総長を一人置くことになっている。

現在は、北米開教区・カナダ開教区・ハワイ開教区・南米開教区の四開教区が設けられている。⁽⁶⁾

また開教地は、開教区のほかに、特に国際伝道の促進を図る必要があると認められる地域を、開教地として指定され、開教事務所を置き、開教事務所長が置かれたものである。適正な規模に発展したときは、これを開教区にすることができるとされている。⁽⁷⁾ 今後、規模が拡充され開教区となることが期待される地域といえることができる。

現在はオーストラリア開教地・メキシコ開教地・台湾開教地・ネパール開教地が設置されている。⁽⁸⁾

この他に、ヨーロッパには浄土真宗を聞信する念仏者が存在し、各自がそれぞれグループを作り聞法・伝道活動を展開している。

開教区・開教地の寺院数・別院数・事務所数・開教使数・開教使補数・僧侶数・護持会員数・信徒数・法話会（フェローシップ）数等々の統計的資料が『宗勢要覧』⁽⁹⁾にまとめられている。

統計資料として提示されている二〇〇七（平成一九）年以降、減少傾向にあることがわかる。開教地においては二〇一六年度から活動を休止しているところもあることが示されている。

このような現状であるからこそ、現場の課題に即応できうる開教使の養成が求められ、従来の「国際真宗伝道講座」⁽¹⁰⁾に加えて、「国際伝道者養成プログラム International Ministerial Orientation Program (IMOP)」⁽¹¹⁾が開設された。また、英語圏における教育の一環として「浄土真宗英語通信教育」⁽¹²⁾Jodo Shinshu Correspondence Course」が実施され、開教区を越えて、英語圏の現役開教使による相互研鑽の「本願寺国際伝道研鑽会 International Hongwanji Overseas Propagation Exchange (IHOPe)」や、本願寺派に限らず大谷派の僧侶も含めた相互研鑽の「東西本願寺国際伝道研鑽会 (West and East Hong(w)anji Overseas Propagation Exchange (WEHOPe)」が実施されるなど、人材育成により一層の力が注がれている。

このような現状において、国際伝道論研究は、龍谷大学における教育に伴い研究されている。その現状を概観しておこう。まずは、何をおいても養成が求められている開教使の育成に関する特別研修講座における教育に伴う研究である。

既に確認したように、一九八〇（昭和五五）年度より現在まで継続している開教使課程における受講者数は、二七七名を数える。開教使課程を受講した後に、本願寺派の開教使に任命されるための研修課程である国際伝道講座を受講したのが、三四名を数える。その中二八名が実際に開教使として任命され派遣されている。つまり龍谷大学の開教使課程で学んだ学生で開教使を目指した者の任命・派遣率は、八二%を超えていることになる。開教使として任命・派遣されることだけではなく、国際伝道について学んだ学生が多数いることは、国際伝道論研究に大きな貢献を果たしてきたと言える。今後は開教使の養成に限らず、国際伝道に関わる人材の育成として教育課程が展開されることが期待される。⁽¹³⁾

さて、通常の大学院カリキュラムにおいては、文学研究科・実践真宗学研究科の「真宗伝道学特殊研究」として渡米し学修する講義が設けられている。修士課程以上の院生が事前研究を踏まえて、国際伝道の現地に赴き、開教使や護持会員・信徒など国際伝道の当事者からの講義を受講したり、様々な活動に参加するなど、実際に体感できるカリキュラムとなっている。また事後には講義の記録をまとめ、各自のふりかえりをまとめて冊子化することによって、研究を進めている。

また、実践真宗学研究科において、二〇一六（平成二八）年度から、「国際伝道論研究」が開設され、講義担当者として研究を進めている。これらの大学院における講義では単なる開教使としての人材育成ではなく、国際化・グローバル化する現代における伝道論の研究として、その理論と方法を研究するカリキュラムとなっている。

国際化・グローバル化が進む現代社会において、浄土真宗の伝道は様々な課題に直面している。異言語・異文化の世界にいる人びとへ伝道する国際伝道は、課題が顕著であり、その課題に実践的に対応している。国際化・グローバル化を「従来の価値観と異なる価値観との交際」と考えると、単に国外における問題だけではない。国内における伝道も、ある意味において同様の課題が現れている。「国際化・グローバル化」「異なる価値観との交際」「異文化・異言語間における伝道」等をキーポイントとして講義し、国際伝道論・現代における伝道論について考究している。また、講義においてインターネットを経由して、国際伝道に携わる実践者・有識者に登壇・講義していただき、リアルタイムな質疑応答を行っている。更に来学者による特別講義なども計画し、国際伝道に直接携わる実践者・有識者からの講義を受講し、研究を進めている。⁽¹⁴⁾

また、宗教実践実習の一環として「宗教間対話実習」も実施されている。これは、NCC日本キリスト教協議会（NCC宗教研究所）による、「日本の諸宗教 研修と対話プログラム Inter religious Studies in Japan Program (ISJP)」の一環として、龍谷大学を訪れて日本文化や日本の宗教・仏教を学ぼうとする、キリスト教文化に育ったドイツを中心とした地方からの留学生に対して、いかにして他宗教の方と対話することができるかを、実践的に宗教間対話を実習するものである。⁽¹⁵⁾

さらに個人的な研究としては、龍谷大学の交換留学によって米国仏教大学院において受講する院生もあり、実践真宗学研究科の宗教実践実習において、海外寺院への調査を行う院生もいる。

このように、龍谷大学の講義や実習に伴って、国際伝道論研究は促進されているのが現状である。

大学の講義に伴う研究だけではなく、本願寺派における聖典の翻訳事業により『英訳親鸞聖人著作集 The Collected Works of SHINRAN』や『浄土三部経』『御文章』の英訳などが出版され、またポルトガル語訳も進めら

れている。仏教伝道教会による英訳作業も進められ、ドイツではデュッセルドルフの恵光日本文化センターにてドイツ語訳も進められている。

このように、国際伝道論研究は、海外における浄土真宗の伝道という実践の現場をもちつつ、実践者の育成という大きな要請に応じつつも、単に開教使育成だけに止まらず、進展してきていることが窺える。

二 国際伝道論研究の研究範囲

二一 「国際」の意図すること

さて、国際伝道という言葉が海外開教ということから発展してきていることは既に顯らかにした。しかし国際という用語も注意が必要な用語である。理解の共通をはかるため、いま一度確認しておきたい。

もともと国際という用語は、インターナショナルという言葉の訳語であらう。いわゆる複数の国家に関わるという、国家間における交際という意味が元来あった。現在よく用いられる用例では国家間の交際に限定されておらず、「世界的な」という意味で使われることが多い。国際伝道論研究という場合の国際は、その言葉の元来の意味よりも、「包括的」「全体的」「地球規模」などを意味するグローバルや、「全部の」「万人共通の」「普遍的な」などを意味するユニバーサルなどという言葉に近いと考えるべきであらう。その意味では現在は国外における伝道を考えているので国際の用語で問題はないと考えられるが、今後、国の内外にわたり、万人に普遍的な伝道を研究していくことを視野に入れるならば、いずれは「普遍的伝道論研究（ユニバーサル伝道論研究）」などと名称が変更されていくことも考えなければならないだろう。

いま国際伝道論研究というのも、決して国家間の交際などという意味ではなく、国外における伝道、それを通し

て国内における伝道も視野に入れた研究という意味に大様に捉えておきたい。

このことは決して奇異なことではなく、浄土真宗の救いの対象があらゆるいのちであるものであり、そこには国籍や人種・性別・職業・学歴・言語・文化・所属組織等の、各自の属性など一切問わないのであるから、至極当然であるはずであつた。反顧すると現在に至るまで、救いの対象があらゆるいのちであるものと知りながら、国や言語・文化等が異なることから、伝道の困難さを思い、積極的に伝道に取り組んできけなかつたこと、至らなさに思いを致し反省の念を持たざるをえない。

二二 最大の研究範囲

国際伝道論研究の範囲を最大限広く考えるならば、釈尊の初転法輪以降のすべての仏教伝播がその最大の範囲と言えるであろう。それはインド・西域・中国・日本への伝播という歴史を振り返ってみれば、まさに国際伝道論の研究範囲というべきである。

また歴史的視点からすると、やはり釈尊在世時から現在、現在から将来にわたる長大な範囲において研究する必要があるであろう。伝道の論理的根拠を阿弥陀如来の本願力、つまり悟りの必然的展開におく浄土真宗においては、地域や時代を超えて研究対象を広げることでもできる。

現在における国際伝道の実践の現場から考えると、浄土真宗のみではなく、仏教他派の国際伝道との交際も考えなければならぬ。また仏教に限らず日本の宗教団体との交際を勘案すると、研究範囲は更に拡大する。そもそも釈尊以降の仏教伝来を振り返ると、さまざまな宗教や文化との交流がありつつ、仏教が定着してきたのであるから、世界の宗教や文化などにも研究は及び、その範囲は広大なものとなる。

二二 当面の研究範囲

国際伝道論研究の研究範囲を最大の範囲で考えておくことは必要なことであるが、研究を実質的に進めるに当たっては、当面の研究範囲を絞り込むことも大切なことと考える。

地域的には「浄土真宗という教えが伝わっている範囲」つまり現在の開教区、開教地等、念仏者が存在する地域、あるいは伝道を展開させようとする地域が想定される。また時代的には、浄土真宗が海外に開教を展開し始めた明治初頭から現在、また現在から近い将来を範囲とすべきかと考える。その中でも研究目的に相応しい研究範囲を、更に絞り込むことによって、より深く研究が進む。しかしその際にも最大の研究範囲のなか、いまどの範囲を抽出し研究しているのかという視野を持つておかなければ、国際伝道論研究全体における位置付けを見失うことになる可能性が高い。

最大限の研究範囲を視野に入れつつ、伝道に関する個々の事例を個別の視点で研究していくことが重要であろう。

三 研究目的

国際伝道論研究の個別の研究目的を、概括的に把握できるように項目を並べてみよう。もちろんこれだけで全ての研究目的を網羅したとは到底考えられない。更に細やかな研究目的を立てて研究を進めるべきである。ただし従来の国際伝道に関する研究業績を窺うと、まさに多岐にわたる研究がなされており、国際伝道論研究の全体における位置付けなどがわかりにくい傾向があったと感じられる。

一度、大きな視野から国際伝道論研究の全体的な研究目的を並べ、一つ一つの研究がどこに位置付けられるのかを、明らかにすることは重要と考える。ここに示すのは、その一試案である。

- 一 教学的課題に関する研究
- 二 歴史的側面に関する研究
 - 二―一 地域別歴史
 - 二―二 教団史
 - 二―三 別院・寺院史
 - 二―四 僧侶、開教使の歴史的側面
 - 二―五 護持会員・信徒の歴史的側面
- 三 社会的側面に関する研究
 - 三―一 当該国・当該地域・文化などの社会的側面
 - 三―二 護持会員・信徒の社会的側面
- 四 伝道の実践的側面に関する研究
 - 四―一 異言語間伝道の研究
 - 四―一―一 翻訳の研究
 - 四―一―二 専門用語の翻訳
 - 四―一―三 法味の表現方法の研究
 - 四―二 異文化間伝道の研究
 - 四―二―一 異文化との峻別
 - 四―二―二 異文化との交流

- 四二二一 変異と温存
- 四二二二 特徴の強調
- 四三 他宗教・他思想との交際・対話に関する研究
 - 四三一 特定の帰属意識がある宗教・思想との交際・対話
 - 四三二 特定の帰属意識のない思想との交際・対話
- 四四 当該国における宗教法人活動の研究
 - 四四一 教団運営の研究
 - 四四二 寺院運営の研究
 - 四四三 寺院活動の研究
 - 四四三一 法要・法座
 - 四四三二 日曜学校
 - 四四三三 地域貢献活動等
 - 四四四 念仏者育成の研究
 - 四四四一 役員（理事・委員長・会長等）の育成
 - 四四四二 日曜学校教師の育成
 - 四四五 布教伝道者育成の研究
 - 四四五一 開教使の育成
 - 四四五二 開教使補の育成

五 念仏者の人格的側面の研究

このように試案を提示してみたが、その内容について具体的事例を挙げて論じる必要がある。ただし全ての項目を提示することは煩雑なことになるので、「一 教学的課題に関する研究」「二 歴史的側面に関する研究」「三 社会的側面に関する研究」「四 伝道の実践的側面に関する研究」「五 念仏者の人格的側面の研究」の大きな項目についてまとめて論じておこう。

「一 教学的課題に関する研究」について。

いわゆる教学史的研究である。国際伝道論研究に限らず真宗伝道学の研究においても、最も重要な研究項目であり、教学的側面における研究を進めなければ、国際伝道論研究は成立しない。

特に国際伝道の実践の現場では、当該国や地域の在来宗教との相異点を明示する必要がある。特にキリスト教を宗教的背景に持つ国や地域では、他力浄土門の浄土真宗が、キリスト教の亜流の如くに捉えられることが多々ある。仏教としての特徴を明確に示すことは必須である。また、仏教といえばメデイーションという思潮の中で、浄土真宗の念仏者としてどのように対応していくかなど、教学的課題に対する応答は、浄土真宗の教義を基として対応しなければならない。まさに教学的課題に関する研究は怠ることができない。

「二 歴史的側面に関する研究」について。

国際伝道の実践の現場は、歴史的背景に支えられて展開している。その当該国や地域の地域別歴史を研究すること。また教団が設立されている開教区などでは、既に一世紀を越える歴史を持つところもあるので、その教団を支えてきた先達の苦勞や、その時々の時流にいかに対応してきたかを研究すること。また各地に建立された別院や仏教会は、切実な思いから納められた護持会員や信徒の懇志によって建立され維持されていることから、寺院

等への所属意識が大変高いことがある。その別院や寺院の歴史的側面の研究を看過することはできない。

また、開教使も護持会員数も信徒数も少なく、歴史的にも浅い国際伝道の現場では、その実践に関わる一人一人の言動が大きな影響力をもっていることがある。一人一人の歴史的側面がそのまま、念仏者のコミュニティや日系社会に対して大きな影響を与えていることが珍しくない。看過できない研究目的の一つと言えるであろう。

「三 社会的側面に関する研究」について。

キリスト教による社会貢献などに影響を受けることが多く、エンゲージドブディズムの影響を受けることもある。また日系社会のなかで維持されている寺院が多く、日系社会に対する貢献が求められることも多い。さらに少数派として生きる人々のアイデンティティの根源となっていることもあり、社会的側面に関する研究は重要である。

この社会的側面に関する項目は、周辺社会からのニーズや、時流に対応することが重要であるが、ともすれば、ニーズに対応することに偏り過ぎてしまふきらいがある。そのような時こそ、教学的側面に関する研究で培われてきた研究業績を礎にして、浄土真宗という教えを確固たる基として対応していくことが肝心である。

「四 伝道の実践的側面に関する研究」について。

国際伝道論研究のまさに具体的・実践的な研究目的である。異言語・異文化・他宗教との交際のなかで実践される国際伝道であるから、これらの研究が重要であることは論を俟たない。また、寺院等による伝道だけが国際伝道ではないが、やはり寺院等を中心として、伝道が実践されているのが現実である。その寺院等の運営、そこに関わる人材の育成に関する研究は、まさに国際伝道の肝要ともいえる研究である。

従来の研究成果にも、この伝道の実践的側面に関する研究が多くなされている。しかし多様な側面をもっているので、個々の課題についての研究は進められていても総合的に研究されていることは少ない。特に伝道の実践的側

面は、現場で伝道に携わる人々の宗教的実践と乖離しては意味がない。その意味においては、実践者と研究者の協力が最も重要と言うこともできよう。この点については後に詳しく論じることとする。

「五 念仏者の人格的側面の研究」について。

上記の項目は研究目的を体系化しあるいは分類化して並べてみたものであった。国際伝道に限らず、宗教は人間の究極的関心事に直接し、究極的に解決を与えられと考えられる。宗教が伝道されていくことを研究するのに、分類化して一つ一つの項目を単発的に研究することだけでは済まされない。様々な研究目的が有機的・重層的に関連しあっていることが、国際伝道の実践の実態である。つまり体系化し分類化をして細分化した研究目的を持つことと同時に、一人の人間としての宗教、一人の人間に対して法が伝わるという伝道を研究するに当たり、その念仏者の一人一人の人格全体からの研究も必要となってくる。

希有なる念仏者が世界各地に実在している。その人自身の人格を一人の人物として統合的また総合的に研究することも国際伝道論研究において、忘れてはならない大きな研究目的の一つと考える。

四 研究方法

国際伝道論研究を進展させるためには、相応の研究方法の確立が必要であることは言うまでもない。既に行われている研究方法を基に国際伝道論研究の研究方法を検討しておきたい。もちろんここに並べただけが、全ての研究方法を網羅したとは到底考えられない。他の学問分野と学際的な研究の上で、更なる研究方法が考案されていくべきであると考ええる。実践真宗学の研究方法が、模索されつつ進捗しているのと軌を一にしていると言えるであろう。

一 文献による研究方法

- 一 一 聖教を中心とした文献による教義的側面からの研究方法
- 一 二 歴史資料を中心とした文献による歴史的側面からの研究方法
- 一 三 マスメディア、新聞・HP記事等の文献による社会的側面からの研究方法
- 一 四 各寺院のHP情報・寺報等の文献による伝道的側面からの研究方法
- 二 調査分析による研究方法
 - 二 一 客観的調査分析研究方法
 - 二 一 一 量的調査
 - 二 一 二 調査方法
 - 二 一 一 一 アンケート調査法
 - 二 一 一 二 面接調査法
 - 二 一 一 三 電話調査法
 - 二 一 一 四 インターネット調査法
 - 二 一 二 分析方法
 - 二 一 一 一 統計的分析
 - 二 一 一 二 因子分析
 - 二 一 三 質的調査
 - 二 一 一 一 調査方法
 - 二 一 一 一 一 インタビュー調査

- 二二二二二二二 非構造化
- 二二二二二二二 半構造化
- 二二二二二二三 構造化
- 二二二二二二二 参与観察
- 二二二二二二二 分析方法
- 二二二二二二二 逐語記録からの分析
- 二二二二二二二 動画・音声・写真等の複合的記録からの分析
- 二二二 主体的実践分析研究方法

このように試案を提示してみたが、その内容について詳細に具体的事例を挙げて論じる必要がある。ただし全ての項目を提示することは煩雑なことになるので、重要と考えられる研究方法について言及し、特に従来の研究には取り上げられることが少なく、今後の研究に是非とも取り上げるべき研究方法と考えられる三点について論及しておきたい。

まず何より、「一 文献による研究方法」の「一一一 聖教を中心とした文献による教義的側面からの研究方法」「一二二 歴史資料を中心とした文献による歴史的側面からの研究方法」は、最も基本であり重要な研究方法であることは論を俟たない。従来の研究もこの研究方法が取られている。

「二 調査分析による研究方法」の「二一一 客観的調査分析研究方法」については、国際伝道の実践の現場を訪れ、その実態を見聞きした上で様々な報告や研究がなされている。国際伝道論研究は、机上のみの研究ではなく伝道という実践の現場をもちつつ、乖離することなく進めるべき研究であるので、このような研究方法は更に向上

させるべき重要な研究方法であると考える。

さて、従来の国際伝道論研究において、あまり取り上げられてこなかった研究方法で、今後の研究に是非とも取り上げるべき研究方法について、論及してみたい。

「一三 マスメディア、新聞・HP記事等の文献による社会的側面からの研究方法」と「一四 各寺院のHP情報・寺報等の文献による伝道的側面からの研究方法」と「一二 主体的実践分析研究方法」の三点の研究方法である。

「一三 マスメディア、新聞・HP記事等の文献による社会的側面からの研究方法」について。

当論文においては本願寺派の国際伝道に絞って検討してきたが、国際伝道の実際の現場は、当該の国や地域の社会に根付いて展開している。その国や地域に取り上げられている情報を収集し、分析や分類を行って、情報共有のためのアーカイブ化などの研究方法は、リアルタイムで進展している伝道を研究する上には必要不可欠である。

本願寺派以外のところで、仏教がどのように取り扱われているのか、浄土真宗がどれほど認識されていないのかなど、世間一般の認知度や関心度に敏感でなければならないと考える。社会貢献が求められる現代において、社会的側面からの研究方法を等閑にすることはできない。今後の研究において取り上げるべき研究方法であると考え。

「一四 各寺院のHP情報・寺報等の文献による伝道的側面からの研究方法」について。

国際伝道の実践の現場においては、各教団、寺院等、開教使や僧侶、また護持会員までもが、文字通り寝食を忘れるほどに力を注ぎ、活動を継続させている。教団や寺院等から多くの情報が、HP情報や、寺報発送などによって発信されている。その情報をどれだけ綿密に精査し、検討し、また分類のうえアーカイブ化をして分析するなど研究方法がとられているであろうか。もちろんある程度の情報の収集は本願寺派の組織体のなかでも行われて

いるが、全体的な情報の収集、分類・アーカイブ化・分析などによる、情報共有が行われているであろうか。一つ一つ力を注いで作製し広報された情報などを、一過性のものとせず蓄積し大きな研究資料とすることは、今後の研究において是非とも取り上げられるべき研究方法であると考ええる。

「二―一 主体的実践分析研究方法」について。

最後に今後の国際伝道論研究において、是非とも取り上げるべき研究方法と考えるのが主体的実践分析研究方法である。この研究方法は既に論じたので詳細は省くが、「二―一 客観的調査分析研究方法」が、実践を客観的調査によって分析する研究方法であることに對して、「二―二 主体的実践分析研究方法」は、研究者自身が自ら主体的に実践して、分析を行い研究する方法といふことができる。

国際伝道論研究は、国際伝道の実践の現場を離れた研究であつてはならないと考える。その現場に身を置き、実際に主体的に実践するなかで初めて見えてくる課題があつたり、その課題の克服などがある。そのような現場で主体的に実践することを通して研究を行うことが重要である。従来の国際伝道論研究において、取り上げられることがほとんどなかつた研究方法であると認識している。

これには決定的な理由がある。国際伝道の実践の現場で主体的に関わるということは、具体的には開教使として任命・派遣され日々の活動を展開することである。開教使の活動をしながら、ここに論じてきた最大の研究範囲を意識しつつ、当面の研究範囲を絞り込み、さまざまな研究目的を概観して、しかも焦点を絞つた研究目的を立てて、相応する研究方法を用いて学術的に研究を進めることは、現実的に非常に厳しい状況であるからである。

しかしだからといって、この研究方法を取り上げなかつたなら、国際伝道論研究を進めてみても、結局は実践の現場と乖離したものに陥る可能性が高い。

主体的実践分析研究方法のモデルとした教育学における「実践研究」においても同様の問題があった。主体的に実践することにより、深く実態に迫ることができるが、客観的、学術的に研究を進めることが困難になるというものであった。

その問題を克服するための一案は、主体的実践する当事者と同等の能力をもち、同等の経験を共有し、主体的実践者と緻密な連携を取りながら、時には実践に参加しながらも、学術的な研究を押し進めることのできる研究者の育成とその研究体制の確立である。

現実的にはそのような研究者の育成は為し得ていないし、体制も確立していない。しかしその可能性がないわけではない。北米開教区には浄土真宗センターに仏教大学院があり、教育局が設置されている。さらに、本願寺派が開教本部にインターナショナルオフィスを開設する計画などを耳にすると、主体的実践分析研究方法を取り入れた、国際伝道論研究が進展する兆しと考えたい。

五 国際伝道論研究の意義

ここまで国際伝道論研究の研究範囲、研究目的、研究方法について、概括的ではあったが論じてきた。上記の論述を通して、国際伝道論研究の意義を論じておきたい。

国際伝道論研究について、既に多くの研究者がそれぞれの学術的特徴を發揮させ、個性的な研究業績を公開してきた。

これらの個別に研究されてきた先行研究を踏まえて、国際伝道論研究を総合的に概括することを試み、最大の研究範囲や、多種多様にわたる研究目的、また多様な研究方法を並べ論じてきた。これは単に概括的な視点を持つこ

とに止まらず、個々の研究が国際伝道論研究の全体において、いかなる位置付けができるのか、その研究範囲、研究目的、研究方法の妥当性を改めて評価することができるようになると考えたからである。

また、従来、国際伝道は開教使として任命され、海外の寺院に派遣される者だけが関わるものと考えられてきた感がぬぐえなかったが、主体的実践分析研究方法などを勘案すると、国内外を問わず、研究者の育成とその研究体制の確立などが必要であることが明らかとなった。

また、それぞれの研究目的の具体的事例をこの論文上では検討することはしなかったが、その事例を検討すると、国際伝道論研究が研究対象として持ち続ける、国際伝道の実践の現場における課題は、日本国内の現代における伝道の課題と類似性や親和性をもっており、浄土真宗の伝道における課題が共通していることが多々あることが明らかであった。いま具体的事例を詳細に論じることしないが、現代日本における伝道の課題である過疎化地域の寺院とその伝道活動などは、ハワイなどの仏教会では更に顕著な状況となりつつも伝道が展開されている。

また都市部においていままでも仏縁なかった方に、なんとか仏法に遇ってもらいたいと考え、様々に実践を展開していることも、異言語・異文化・異なつた宗教背景の社会のなかで、開教を実践している海外寺院の活動は、更に厳しい状況のなかで実践している。

また、多様化する社会の様々な問題に対して、仏教徒として、浄土真宗の念仏者としての対応が迫られる国際伝道の実践の現場は、宗教や宗教者の社会貢献が求められている現代日本における伝道の課題と、共通していることがある。

類似性や親和性があつて課題が共通することが、広狭、浅深、顕著と隠微などの相異点があることにより、それぞれの特徴を通して、その短所や長所などを捉え直す契機ともなり得る。つまり従来の伝道に関わる実践の一つ一

つを捉え直すことにもなり、既存の伝道に関する資源や環境、たとえば寺院という施設や伝統的行事等の価値を再発掘し得ることにもなる。それは同時に伝道の実践の新しい方途を創造していくことにもつながる可能性を持っている。

国際伝道論を研究することは、国外に出向かなくとも、いまここで浄土真宗の伝道に関わる実践者として、大きな示唆を与えられる研究ということができる。

まとめにかえて

当論文においては、概括的な論述に終始した感が否めない。しかし実践真宗学研究の一つとして、国際伝道論研究の総合的な研究の結実に向けた端緒を開くことができたかと考える。

今回論述しなかった一つ一つの具体的事例については、個々に研究を深めていかなければならない。その際には当論文で論究したとおり、国際伝道論研究の最大なる研究範囲を意識しつつ、研究範囲を絞り、研究目的を明確にして、相応した研究方法を取り上げて、個別に研究に取り組まなければならない。

国際伝道論研究によって、阿弥陀如来の救いは、まさにありとあらゆるいのちあるものを対象としていることを知りながら、自らとは国籍や人種・性別・職業・学歴・言語・文化・所属組織等が異なる人々に、積極的な伝道に取り組めないことを反省させられる。いや、未だ阿弥陀如来の救いに遇うことを得ていないいのちがありながら、そのいのちに思いを馳せることもできていなかったことを、国際伝道論研究によって思い知らされる。

世界には未だ阿弥陀如来の救いに遇うことを得ていない人が多数いる。その一人一人に伝道がなされることを思うと、想像を絶する道程を感じる。しかし、未だ法に遇うことを得ていない人が多数いるということは、それだけ

伝道の可能性も大きいということでもある。

国際伝道論研究によつて、研究範囲の広さが知らされ、研究目的の多様性から多くの研究課題が明らかになり、さらにその個別の研究の位置付けを明確にすることが明らかとなった。また、多くの研究方法から相応しい研究方法を取り上げなければならないことも明らかとなった。

何より、自らの布教伝道の実践を振り返らせ、自らの至らなさを思い知らされ、同時に大きな可能性があることも思い知らされるところに、国際伝道論研究の意義の一つがあると示しておきたい。

註

- (1) 拙稿「真宗伝道の実践研究 国際伝道の実状から窺う」『真宗学』一二三・一二四、二〇一一(平成二三)年
- (2) 国際仏教文化協会HP参照 <http://www.re.jp/asahi/iabc/homepage/Japanese.htm> (二〇一七(平成二九)年二月一五日確認)
- (3) 国際真宗学会HP 参照 <http://iabsinfo.net/> (二〇一七(平成二九)年二月一五日確認)
- (4) 「浄土真宗本願寺派宗則」
- (5) 「浄土真宗本願寺派宗法」第四〇条二
- (6) 「浄土真宗本願寺派宗則」「国際伝道推進規程」第三条
- (7) 「浄土真宗本願寺派宗則」「国際伝道推進規程」第九条
- (8) 「浄土真宗本願寺派宗達」「オーストラリア開教地指定条例」「メキシコ開教地指定条例」「台湾開教地指定条例」「ネパール開教地指定条例」
- (9) 『宗勢要覧 一二〇一六(平成二八)年度版』浄土真宗本願寺派統合企画室 二〇一七(平成二九)年一〇月発行。毎年度発行され本願寺派の統計的資料が開示されている。近年の推移も提示されている。
- (10) 本願寺派国際センターHP 国際伝道講座参照 <http://international.hongwanji.or.jp/jp/html/category3-3.html> (二〇一七(平成二九)年二月一五日確認)

- (11) 本願寺国際派センターHP 国際伝道者養成プログラム参照 <http://international.hongwanji.or.jp/jp/html/cate-gory3-4.html> (二〇一七(平成二九)年二月一日確認)
- (12) 浄土真宗センターHP 浄土真宗英語通信教育参照 <http://jscc.cbe-bca.org/> (二〇一七(平成二九)年二月一日確認)
- (13) 二〇一七(平成二九)年度開教使課程委員会において「開教使課程カリキュラム検討ワーキンググループ」にて答申作成して検討中。
- (14) 龍谷大学HP news「Skypeを利用した特別講義を実施【実践真宗学研究科】」参照 <https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-785.html> (二〇一七(平成二九)年二月一日確認)
- (15) 寺本知正「NCC(日本キリスト教協議会)宗教研究所の留学生プログラム」八頁・「編集室より」一一頁(『IABC NEWS』no. 50 国際仏教文化協会 二〇一五(平成二七)年二月)参照 <http://www.ne.jp/asahi/iabc/homepage/nyusu.htm> (二〇一七(平成二九)年二月一日確認)
- (16) 拙稿「実践真宗学における研究方法の研究」『真宗学』一二九・一三〇、二〇一四(平成二六)年

【訂正】拙稿「主體的実践分析研究方法」の研究『真宗学』一三三、二〇一六(平成二八)年の註に誤記がありました。左記の通り訂正し、関係者の皆さまにお詫び申しあげます。

誤 内藤智康著「親鸞の神祇観についての一考察」
 正 内藤知康著「親鸞の神祇観についての一考察」